

やわらかな曙やさしき夕茜天はしずかに姉妹を生み
ぬ 中西由起子

曙と茜は姉妹だという見立てである。それそれを形容する「やわらかな」「やさしき」もなかなかいい。伊藤一彦の有名な一首、「母の名は茜、子の名は雲なりき丘をしづかに下る野生馬」(『海号の歌』)を思い出させる。愛誦性のある一首と思う。

青春をSSと略す学生が黒板の棧の隅までを拭く

大津貴寛

学生の予想外の面を二つ見た意外性をうたう。作者は若い教員。この歌は「東京歌会」に出され、「SS」が何か意味をもつのではないかとの読みが出された。「棧の隅」とひびきあっている。「SS」はナチを思い出させる、といった意外な読みも出されて感心した。あまり深読みするのはいかがかと思うが、ナチを連想する読みは可能かもしれない。

おとがひの滑る一瞬初春の雲を映せるノートに手は
落つ 祖母井美香

やや分かりにくいのが、居眠りからふと目覚めた場面と読んだ。「おとがひを滑る一瞬……手は落つ」と文脈はつづく。机に肘をつけて顎をささえ居眠りしていたのだ。「雲を映せるノート」はまだ何も書いてない白紙のノートの比喩だろう。自分のことなのか。他人とも読める。現実の作者にこだわれば、教室の生徒をうたっているのかもしれない。今月の四首、どれも面白い。

短歌の現在

No.369 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

どことが好きと聞けば尾を振る姿だと夫は答えぬ我に
尾はなし 峰由美子

ひねりがうまきいていて、さらっとしたユーモアの歌となっている。

少しづつ薔薇色帯びてゆく宇宙 天文学者の晩酌進
む 武藤義哉

軽いユーモアの歌と読むのがいいだろう。ほろ酔いの天文学者の心の世界である。

よその家に少し眠りてよその家の匂いのする子
母はさみしい 堀越貴乃

結句「母はさみしい」がしみじみとひびく。まだ幼い子に対する母親の感覚である。昔とちがって最近「よそ」「うち」とあまり言わないような気がする。だからだろう、一首、クラシックなひびきを感じられて、それが持ち味になっているようだ。

東南の光に巻かれ耳として組立てらるる朝の軟骨
岸並千珠子

ぐっすりと眠った朝の目覚めてからの数秒間の感覚をうたう。好天の日の窓からの明るい日差しが読める。取材感覚のよさに注目。

天日干しにされた布巾の健やかに新入部員は並んで
走る 須藤歩実

上二句が「健やかに」を起こす、いわゆる有心の序になっっている。中学が高校の校庭だろう。天日干しの布巾のような日の匂いがする新入部員たちの雰囲気は序詞に